

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎高天の原（たかまのはら）からも逐（や）らわれたスサノヲは、さまよう道中で、食べ物をオホゲツヒメに乞うたのじゃ。すると、オホゲツヒメは、鼻や口、また尻からも、くさぐさのおいしい食べ物を取り出して、いろいろ作り調べてもてなしたのじゃ。その時、そのわざを覗いて見ておったスサノヲは、わざと穢して作っておるのだと思うての、すぐさま、オホゲツヒメを切り殺してしもうた。

◎すると、殺されたオホゲツヒメの身につぎつぎにものが生まれてきて、頭には蚕が生まれ、二つの目には稲の穂が生まれ、二つの耳には粟が生まれ、鼻には小豆が生まれ、陰（ほと）には麦が生まれ、尻には大豆（まめ）が生まれたのじゃ。

◎殺された女神の身体から穀物が誕生するという神話は、インドネシアなど南太平洋一帯に分布し、ハイヌウエレ型穀物起源神話と呼ばれている。

◎ハイヌウエレ神話：インドネシア：ハイヌウエレという娘は、用便をするとその排泄物が財宝に化けた。その超自然力を不気味に思う人々に殺された。彼女の死体を掘り出し、切り刻んで、あちこちに植えた。すると、ヤマイモやタロイモが生じた。以後それらは、彼らの常食物となった。

同様、死体からの、作物起源神話は世界各地にある。

◎スサノヲの活躍、その次は、オホクニヌシへと話は移っていく。ここではあらすじを書いておさらいである。

◎追われたスサノヲは、出雲の国、肥の河に下りてきて、歩いていた。老いた男と女、若い娘をはさんで泣いておった。お互いに名をなりのり哭くわけを聞いた。コシノヤマタノヲロチが毎年やって来て、娘たちを喰ってしまい、この娘の順番がすぐにやってくる、という。そやつの姿は、と聞くと、目は赤く燃え、体はひとつ、頭と尾は八つ、山のように大きい、と答える。

スサノヲはヲロチのさまを聞き、お前の娘をわれにくれるか、われはアマテラスの弟だ、というと、そのような貴いお方なら、よろこんで奉（たてまつ）ります、といった。スサノヲは童女（おとめ）の姿を櫛に変えて刺した。

お前たちは、八つの門を作り、そこに強い酒をあふれるほどに置いておけ。

そこに、ヤマタノヲロチがやって来て、八つの頭で酒を飲み干してしまい、スサノヲの企み通り酔うて寝てしまった。

スサノヲは、十拳の剣（とつかのつるぎ）を抜き放つと、その蛇を切り刻んでしまった。そのとき、ひとつの尾の中から太刀が出てきた。その太刀を高天が原のアマテラスに差し上げた。のちの、草薙の太刀である。

ハヤスサノヲは、クシナダヒメを手に入れ、出雲の国の須賀というところに宮を造った。

やくも立つ	いづもやへがき	八重にも雲のわき立つ	出雲の八重の垣よ	
妻ごみに	やへがきつくる	共寝に	妻を籠めるに	八重の垣を作るよ
そのやへがきを		その素晴らしい	八重の垣よ	

そのあと、たくさんの子や、その子孫が生まれる。

オホクニヌシ：スサノヲの六世の孫と位置付けられる。

またの名を、オホナムヂ・またの名を、アシハラノシコヲ・またの名をヤチホコ・またの名を、ウツシクニタマ、あわせて五つもの名前をもった神である。

◎オホクニヌシの話のはじまり、はじまり。最初は、別名、オホナムジで進行する。

◎八十（やそ）あまりの兄弟がおり、みな、稲羽のヤガミヒメを妻に娶りたいと、もろとも稲羽にでかけていくのじゆ。オホナムジに袋を担がせ、共のひとりとして連れて行った。そこに皮を剥がれた赤裸のウサギが倒れ臥せておった。

◎原文では、八十神、とあるが、兄と弟の対立として語られていく。

◎八十の神々がウサギをからかって、「海の塩水を浴び 尾根の上に 臥せっていると いいぞ」といった。ウサギは言われたままに臥せっていると、塩が乾き、身のうす皮は風に吹かれ、乾き裂けてしまった。うさぎは、痛み苦しき泣き臥せていた。

◎ウサギが、オホナムジに、身の上をかたる。

わたしはオキの島に住んでいました。この地に渡りたいと思っていたが、渡る術がない。そこで海に住むワニをだまそうと思い、「ウサギとワニの 数競べをしようじゃないか イキから 気多の岬まで 並んでくれ わたしはその上を踏みしめて 数を数えながら渡るから そうすれば数がわかる」

ウサギは、ひとつ、ふたつ、と数を数えながら渡って来て、最後にうれしくなって、口が滑ってしまった。

「やあい だましてやった」

岸近くに伏していたワニに、噛まれ、白い皮を裂き剥がされたのです。

◎似た話がインドネシアからマレー半島あたりで、バンビとワニの話として語られている。海のモノと陸のモノの優位性が語られ、陸のモノの知恵が優位だと語られる。ここでは、オホナムジの出番がないので、ウサギの失敗談に進んで行く。

◎オホナムジは、赤裸のウサギに、「真水で身体をよく洗い 蒲の穂を敷き散らし 身体を横たえていれば 元の 膚のように治るだろう」ウサギはそれで治った。

なんとそれは、ウサギ神で、「あなたさまこそ ヤガミヒメを 手に入れます」と申しあげた。

◎さて、八十の神々に、妻問いを受けたヤガミヒメは、「お受けできません オホナムジ様に 嫁ぎたい」

◎八十の神々は怒り狂って、オホナムジを殺そうと次々に企むが、オホナムジはその都度、助けられていく話が続く。焼けた大岩を落として押しつぶして殺す。巨木の裂け目に挟んで、押しつぶして殺す。逃げたらまた追ってくる。「根の堅洲の国の スサノヲさまを 頼りなさい」なんと六代前の先祖が蘇って出てくる。

◎八十の神々はオホナムジを、伯耆の国に連れて行き、「赤イノシシを 上から追い落す 下で捕まえろ」といい、真っ赤に焼けた大岩を上から落とした。オホナムジは焼けた大岩に押しつぶされ死んでしまった。

◎母神が、高天が原の、カムムスヒにお願いして、キサガヒヒメとウムギヒメがやって来た。

キサガヒヒメが、オホナムジの岩にへばりついた骸を、貝の殻で少しずつ岩からはがし、ウムギヒメが母神の乳の汁に薬を混ぜ、ひどく焼けただれたオホナムジの身体にくまなく塗った。すると元の身体に戻って、出歩き遊びまわった。

◎遊びまわった、と言うことはまだ子供だったということかな。巨木の圧死は次に。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎オホナムチが、生きかえり、遊びまわっているのを見て、八十の神々は怒って、またもやオホナムチをだまして、山に連れて行き、大きな樹を切り倒し、縦に中ほどまで切れ目を入れ、その切れ目に楔を打ち込んで、隙間を作ると、その中にオホナムチを押し込めるや、楔をはずしたのじゃ。オホナムチは太い樹の切れ目に挟まれ、またもや殺されてしまった。

すると、これも、またもや母神が現れ、泣きながら我が子を探すと、木の間に挟まれ押しつぶされたオホナムチを見つけ、すぐさまその木を二つに裂いて、我が子を取り出し、活かした。

◎巨木を割って隙間を作る、その隙間に挟み込む、圧死する、巨木を二つに割って身体を取り出す、活かす。すごいパワーがいるだろう、真っ赤に大岩を焼き上からそれを落とす、という方法、これらの殺し方の方法が突飛で面白い。死んだ者を蘇らせる技術もすごい。圧死の場合の蘇り方法は書いてないが知りたいね。

◎オホナムチは木の国（紀の国かな）オホヤビコのもとに逃れたが、まだ追ってくるので、「スサノヲさまの 根の堅洲の国においでなさい 大神がよき議（はかり）ごとを考えてくださるでしょう」

◎スサノヲは父のイザナキに、泣きわめきながら、「妃の国 根の堅洲の国に 行きたい」と言っていた。オロチ退治をしたのち、クシナダヒメと結ばれ宮を造った。またまた六代あとに現役で登場という愉快。

◎オホナムチは、教えられた通り、スサノヲのもとに行くと、まず出てきたスセリビメが出てきて、お互いうつとりと火花が散り、心を許し、そのまますぐさま、ふたりは結ばれた。が、オホナムチには、またまた、次々の試練が待っている。

◎スサノヲ：大神は、オホナムチを殿のうちに招き入れ、奥の屋のヘビの室屋に寝かせなさせた。妻スセリビメは、「もし ヘビが あなたを昨（く：食うと同意）おうとしたなら このヘビの領巾（ひれ：布）を振りなさい」と領巾を渡し、その通りにしたらヘビは鎮まり、オホナムチはぐっすり眠れた。

◎次の日には、ムカデとハチの部屋にいれられた。またまたスセリビメが、ムカデとハチの領巾をくれたので、朝になると健やかに起きられた。

◎つぎにスサノヲは、鳴り鏑矢を野に射入れ、その矢を探せと命じた。オホナムチが野に入るとまわりから火を放った。オホナムチは逃げ場がなく困っていると、ネズミが足元で鳴いた。「内はホラホラ 外はスブスブ」足元に空洞があり、そこに落ちて火がおさまるのを待った。そこへネズミが、鏑矢を持ってきた。スセリビメは、夫が死んだものと思い、葬（はぶり）の用意をした。スサノヲも聾は死んだと思った。

◎そこにオホナムチが鏑矢を持って出てきたので、スサノヲも折れるしかなく、室屋に連れ入り、おのれの頭のシラミを取らせたのじゃ。オホナムチがシラミを取ろうとすると、なんと大きなムカデがうじゃうじゃいた。妻が夫に、ムクの木の実と赤土を渡した。オホナムチはそれを口のなかに入れ、吐き出した。大神はそれを見て、ムカデを喰ってくれている、愛しい奴と思い寝入った。

◎オホナムチは眠ったスサノヲの髪を、垂木に結び付け、スセリビメを背負い、大神の宝物、生太刀（いくたち）と生弓矢（いくゆみや）を持って逃げだした。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

- ◎オホナムチは、兄の八十の神々からさんざん攻められ殺されかけ、根の堅洲の国に住まうスサノヲのもとにやって来た。来て早々スサノヲの娘、スセリビメをひと目見るなり、お互い舞い上がり結ばれてしまった。スサノヲは、オホナムチに次々と試練を与える。ヘビのいる部屋に寝させる、ムカデとハチの部屋に寝させるが、スセリビメの助言で助かる。草原で火攻めに会うが、ネズミの助言で助かる。和解したかに見えた、スサノヲとオホナムチは、同じ部屋でスサノヲの頭のシラミを取るが、スサノヲが気持ちよく寝てしまう。オホナムチとスセリビメは、手に手を取って逃げ出す。スサノヲは、追ってくるが、あきらめ、最後にオホナムチにエールを送る。
- ◎その、お前の持っている、生太刀（いくたち：スサノヲの宝）と生弓矢（いくゆみや）とをもって、そなたの腹違いの子どもや弟どもを、坂の尾根から追いつめ、また、河の瀬までも追い払い、おのれが葦原の中つ国を総べて治めてオホクニヌシとなり、また、ウツクシクニタマ（オホクニヌシの5個の名のひとつ、ここにしか出てこない）となりて、そこにいる我が娘スセリビメを正妻（むかひめ）として、宇迦の山（出雲の地名）のふもとに、土深く掘り下げて、底の磐根に届くまで、宮柱を太々と突き立て、高天が原に届くまでに、屋の上にヒギ（チギとも言い、神社建築の屋根の上に高くのびた棒）を高々と聳やかして住まうのだ、この奴（やつこ）め。
- ◎先生：一連のスサノヲによる、試練をくぐりぬけることで、オホナムチは少年から大人へと成長していく。こうした試練の描写は、成人式の通過儀礼において、少年たちに課せられた試練と関わるのではとされている。この神話は、オホナムチがスサノヲの試練を切り抜けることによって、地上の王者として再生してゆく、王になるための通過儀礼が語られているとみる。
- ◎死んだと思っていた、オホナムチが、スサノヲとスセリビメの前に現れ、スサノヲは折れるしかなかった。オホナムチを大きな室屋に呼び入れ、おのれの頭のシラミを取らせた。
- ◎頭にいたのはシラミではなく、大きなムカデが、うじゃうじゃと這いまわっていた。ダニやシラミは、太古の昔から寄生虫として人間の身体に住み着いていた、なんと高貴なお方でも、そうなので、下賤の庶民らはもっと壮絶と想像がつくが、外でクサリに繋がれたワンコどもも、さほど壮絶ではないので、身体をかきまくるぐらいで平静に過ごせたのかもしれない。スサノヲの頭に、大きなムカデがうじゃうじゃ、これはなんなんだ。アマテラスの弟の頭が、と思ってしまう。
- ◎気持ちよく眠ってしまったスサノヲの髪の毛を、室屋の屋根の裏に渡してある垂木ごとに、その髪を分けて結び付け、五百人（いほたり）がかりでしか引けぬ大岩をその室屋の戸口に運んできて閉ざし、その妻スセリビメを背負い、逃げ出した。
- ◎オホナムチが手に持っていた天の証琴（のりごと：根の堅洲の国の宝）の絃が樹に触れ、土も揺れ動くばかりの大きな音がしたので、ぐっすり寝ていたスサノヲは驚いて飛び起きた。垂木ごとに結ばれた髪の毛に引かれ、その室屋が引き倒されてしまった。すぐにあとを追うことができず、ひとつひとつほどいているすきに二人は遠くに逃げた。それでもスサノヲは、葦原の中つ国につながる黄泉の平坂まで追って行って、ふたりの姿を見て、オオナムチにエールを送ったのだ。

- ◎「明神ブルーが見たい」と先日来うずうずしていた。晴れて穏やかな日に行きたい、吹雪の雪山はもう願ひ下げだ、と調べていた。何日か前から13日がいいと予報士が言う。皆さんをお誘いしたがダメなので、ソロ登山になってしまった。5時頃に家を出ると、奈良の葛城あたりで6時、まだまだ夜の雰囲気だ。
- ◎通行止めの看板のある臨時駐車場に7時到着なれど、もう5台ほど車が止まっていた。いつもの駐車場より6キロ手前らしい。歩いてわかったことだが、土砂崩れは奥の駐車場の対岸である。以前にも崩れ、コンクリートを組んだ養生がされているが、その底の土砂が崩れ、コンクリートが浮いた状態なのかな。奈良は先日の前鬼のあたりといい、土砂崩れ、崖崩れが多いねえ。
- ◎8時過ぎいよいよ登山口。昔は、駆け足で登れるような山、なんてえらそうなことを言っていたが、渡渉が4回もある川筋、歳をとると苦手になっていく。以前のようにホイホイと岩の上を飛べなくなった。太陽が樹々の間からキラリ見える、いいねえ、期待通りの晴天になってくれ。とはいえこのあたりは北向きの斜面、水溜まりは凍結している、雪も残っている、川に滑り落ちないように注意である。
- ◎10時頃、渡渉が終わったあたりで、六本爪のアイゼンを着けた。先日来何度もつけているのに時間がかかってしまった、冷たさで手が痛いほど冷えてくる。若いころは、「ずぼ足で歩くんだ ぎりぎりまで着けないよ」なんて粋がっていたが、ジジイになると平らな場所で、穏やかなうちにさっさと着けたほうがいいと反省。
- ◎渡渉が終わるとジグザグの登山道、コラシヨドッコイショとどンドン稼げる、ポケットの中のスマホ君が、「高度900M」「高度1000M」と何度も教えてくれる。1000Mと言えば比良山系なら一番高いところに近いが、奈良の山は滋賀に比べ500Mほど高い山が多い。たっぷり雪が残っている、北斜面なのでまだまだ寒い。今日は風がないので、フードなしの防寒具だけで登っている、毛糸の帽子だけ、冬用手袋は着けている。
- ◎11時にてっぺんに到着。手前に水場がある、水が流れているところがある。てっぺんの東屋からすぐそこが水場だと思っていたが、最近になって、「え すぐそこじゃないじゃない」と驚かされている。10年前20年前と距離の感覚、体力なのか、気力なのか、空気なのか、水場が過ぎててもまだてっぺんに着かない、なんて、どこいしょだ。
- ◎ちょっと早い飯にしよう、朝は5時頃に喰ったからね、もちろん途中歩きながら、パンを、チョコを、干し葡萄をパクパク食べていた。少し下で一本取った時も、饅頭を喰おうと思いとどまった。まもなくてっぺん、今、饅頭を喰うと飯がまずくなるとがまんした。「さ まずは ヌードルに湯だ 湯が先だ」「あれれ・・・」「まさか・・・」ヌードルが入っていないじゃないか かんじんのヌードルが・・・」ヌードルとおにぎりと決めていた。ほんとうに大失態、ばかだねえ。冬になって、この組み合わせがいいと、我ながらいい組み合わせだと、悦にいていたが、まともに成功したのは一回だけ。テルモスのパッキンをし忘れ電車の中で湯をこぼしてしまったこと。前の日からテルモスを用意していたのに、かんじんの湯を持ってくるのを忘れたこと。
- ◎おにぎりを食べ、饅頭を食べ、湯を飲んで、物足りない昼食を済ませた。それでも景色は素晴らしい、一面の銀世界、もう1時間早ければ樹々にも雪がたっぷりついてははず、青い空、白い地面、霧氷の景色、ほほほ、最高である。
- ◎明神ブルーなんて言葉は知らなかった。山記録のネットで若者は流行らせた言葉なのか、それでもそのブルーが見てみたかった。今日はまさにそのブルー、明神ブルーだ。どんな青ですかと絵かきのオレに問われても、「深い宇宙の青かな」なんてわかったような答えしか出てこない。絵の具では青色は全部で4.5色は絵の具箱に入っているが、そんな絵の具じゃ、宇宙の色は出せないね。
- ◎陽が照っている、じりじりするねと言うほどに直射日光が顔にあたる。サングラスを忘れないようにと昨日は思っていたがこれも入れ忘れた。樹々の枝々にたっぷりついてはいる雪の塊が、ぼたりボタリと落ちていく、この暑さ、今日の午後には相当雪が溶けそうである。帰り道、もう登山道の終点と言うところで、ズルリすってん。下りの林道で、凍っているな、水が流れているところを歩こう、ここでおもいきりのスッテンころり、腰骨ごとたたきつけられた、イテテである。3時に車を発車、6時に帰宅した。そう、榊井宅にも訪れた。

◎先日の明神平の上で、「お陽さんが 顔にあたり 痛いぐらい」と感じていたが、それ以後安威川河原に出てきて、「今日も お陽さんを 感じるね 熱いね めくいね」なんてことが 2.3 回あった。冬の寒い間はお陽さんで焼けるなんてことはまったく気にしなかったけれど、これからは毎日河原に出て、2 時間近く陽を浴びて、「下品な陽焼け そらあ 百姓焼けだ 真っ黒けだ」と衣川さんが笑っていたように、だんだん顔が黒くなっていく。2 月の今、お陽さんが出ていると、「あったかい」と喜んでいるが、しばらくすれば炎天下の日々、うだる暑さがやってくる、「暑い あつい いたい」そんな暑さがやってくる。早く終わってくれとぼやく毎日がやってくる。

◎京都の“城南宮”と言う神社に梅を見に行ったら。家族に行くと頼まれ、おおよその場所を調べると、阪神高速：京都南 IC のそば、「混むかな 駐車場はあるかな」と出発した。神社のりっぱな駐車場はあるが、有名な梅を見るためにずらり車が並んでいる。「1 時間ぐらいかかるかな」と案じていたが、30 分ぐらいでなんとか駐車できた。境内は人だらけ、紅白のしだれ梅が見事に咲いている。梅も庭も手入れが行き届き、さすが京都の有名神社、拝観料の 1000 円も惜しくない見ごたえだ。ただ皆さん、写真を撮ることに夢中で、「ちょっと 梅を見れば」と言いたくもなる混雑ぶりである。

◎境内の看板に“戊辰戦争”の話が載っていた。聞いたことがあるぞ、習ったことがと、調べてみた。

1868 年：戊辰の年、大政奉還後の徳川慶喜への処遇に不満の旧幕府軍と、新政府軍が京都伏見で戦った。

その後、江戸城明け渡し（勝海舟と西郷隆盛の会談で闘いは避けられた）、会津の戦い（白虎隊が有名）、五稜郭（榎本武揚や土方歳三）戦いが続いた。

50 歳代の時、車で東北方面を走る予定だった。「お前の免許証には、本籍が山口県と載っている。福島県では運転免許証を見せるようなことはするな。いまだに合図の人は、長州に恨みを持っている」「ほんまかいな」

長州藩：高杉晋作・桂小五郎・・・薩摩藩：西郷隆盛・大久保利通・・・

戊辰：ぼしん、つちのえたつ：十干 10 の甲乙丙丁・・・十二支 12 の子丑寅卯・・・120 年に一度の計算。

◎冬のアトリエ、5 度の時は寒かった、と今では笑い。朝起きて温度計は 5 度、陽が照ると 7 度ぐらいに上がるが、雨が降っていたりすると一日ずっと 5 度の日もあった。この温度では、セーターをもう一枚、ネックウオーマーに帽子、室内なのに手袋が欲しいとも思った。アウトドアの時は、下着の暖かいものを着るといい、ネックウオーマーやフードを被るといい、手袋は二重がいい、なんて知っている。アトリエでも同じことで、着込めば大阪の寒さはなんとかしのげる。そんな寒い日が 30 日もなかったと思う、冬は過ごしやすいねえ。暑さ寒さで思うことは、最初の一週間がきつい、その一週間でやり過ごせば、暑さ寒さに身体が慣れ、氷が張るような日でもそれを見ながら横目で過ごせる。

◎今日の安威川は流れも静かで、たゆたゆと黒い水面が浮かんでいる。カモ・オオバンはたくさん活躍しているが、その他の鳥の姿が見えない、不思議なことである。常連のカラス・サギ・ハトがいないねえ。

スマホの中に二つの万歩計が入っている、山仲間の方が、「今日は ○○歩 歩いた」とよく話すので、オレも気にして見るようになった。毎日 15000 歩以上が連日続いている。FIT というソフトと大阪府のアスマイルが入っている。二つとも同じ数字が出るのでどちらかがどちらかを頼りにしている関係かも知れない。

FIT の方には、強めの運動、という項目があり、早足で歩くとその数字が上がっていく仕組みになっている。

不思議なのは、山の中の一日、エンヤコラと上り下りをして、相当ハードにいちにち歩くが、FIT 氏はそのハードさは感知せず、「ゆっくり だらだら 長時間 歩いてたら あかんぞ」という感知の仕方をしてくれる。「山は ハード なんだぜ」ということは聞いてくれない。

嫁蛇女医師治語第九 <へみに とつぐ をむなを くすし ぢ すること>二十四巻

◎日本霊異記に載っているらしい。娘が桑の葉を摘みながら大蛇に犯され死んだ話。

蛇見女陰発欲出穴当刀死語第三十九<へびによいんをみて よくをおこし あなよりいでて

かたなにあたりて しぬること>二十九巻

◎土塀の前で、小用中の若い女が、潜んだ蛇に陰部を犯され、夢心地となった。

◎第九：河内の国、賛良の郡（さららのこほり：現：四条畷市）に住む娘が、蚕にやるために大きな桑の木に登って葉を集めていた。どこからともなく這い出でてきた大きな蛇が桑の木に巻きついた。「蛇がいるぞ」と聞き娘は飛び降りたと同時に、蛇は娘の身体にまといつき、あっという間に交接を遂げた。

父母は嘆き悲しみ医師を呼んだ。ちょうど名医がいて診てもらったが、蛇と娘は交わったまま離れない。

稲藁を焼いた灰を湯に混ぜる。猪の毛を刻み粉末にして入れる。娘を横ざまに吊るし、その汁を陰部から注ぎ入れる。蛇はたちどころに離れたのでたたき殺した。その時、陰部から猪の毛が突き刺さった蛇の子がおたまじゃくしのような格好でたくさん出てきた。そのあと娘は正気を取り戻した。

◎第三十九：一人の若い女が近衛大路を歩いていた。宗像神社の横を歩いている時、どうしても小用がこらえきれず土塀に向かってしゃがみ込み小用をすませた。ところが、2時間ほど経っても立ち上がらないので、女童が声をかけたが、立ち上がらない。4時間ほど経って、女童は泣きながら待った。馬に乗った男が大勢の従者を連れ通りかかった。女童が泣いているので従者に尋ねさせた。

男が見ると、腰帯を結び市女笠を被った女が土塀に向かってうずくまっている。女の顔を覗くと、すでに顔色がない。男が女を見ると、卑しい身分とも思えず、引き起こそうとしたが、女は身動きもしない。

男が土塀を見ると、穴から大きな蛇が女をじっと見守っていた。「さては 蛇が 小用をしている女の前を見て 欲情をおこし 女の正気を失わせてしまったのか」と気づいた。

男は腰の刀を抜き、蛇のいる穴に向け突き立てた。それから従者どもに女の体を持ちあげ立たせた。蛇はにわかにか土塀の穴から鋒を突き出すように飛び出したので、真っ二つに裂けて、死んでしまった。

蛇は女を見つめて、正気を失わせていたのだが、にわかにか女が立ち退いたのを見て、刀が立てかけてあるのも気づかず飛び出したに違いない。

されば蛇の心は言いようもなく恐ろしいものである。

◎蛇が、女陰に興味を持つ、顔を突っ込む、「そんなばかな ウソ話だろう・・・おとぎ話だろう・・・」と思っていたが、かつて、そういう事件がいくつかあったらしい。

◎遠野の郊外、観光バスが峠を走行中トイレ休憩を取った。その時代、山の中の道にトイレなどなく、それぞれ草むらで放尿した。女性のバスガイドもやぶの中に入っていったが、その折、マムシが女陰に侵入し、亡くなったらしい、と新聞が伝えている。新聞は、「臀部を噛んだ」と報道したらしい。

◎北海道で、花摘みの女性が昼寝をしていて、同じような被害にあっている。当時女性の下着は腰巻だけで、今のパンツは無かった。調べると外国でもこういう事件があったらしい。この類の事件、スケベ心で話すには気持ちが悪すぎる。ヘビが湿った穴を好むとはいえ、自分のことと考えると、口や鼻、まして尻にでも侵入されたらたまったものでない。笑いごとや、下ネタ話ではすまされない、失神するね。

◎女性の内部に蛇が入るのを、「開入蛇」といい、カエルを近づけるとか、恥を忍んで医者に行くと、モルヒネを蛇にうって簡単に抜けたとか、胡椒や煙草のヤニなど胡散臭い話が多い。

隠世人聲・・・語第四 <よを かくるる ひと の むことなる こと>

◎またまたこの話には感じ入ってしまった。第四の前の第三、不被知人女盜賊語<ひとに しられぬ をんなぬすびと のこと>この第三は今昔物語集の中の傑作だと思っている、最高に面白い、痛快であるが、第四は、ちょっと歪んでいる、危ういながらも楽しげであるということで、オレの琴線を揺すぶるのかな。

◎前途も暗い男が、縁あって豊かな女と契り、愛情細やかに通いつめるうち、ある日突然、女の父と名乗る醜怪な人物が現れる。

◎男は一夜も欠かさず通い続けるうち、四、五か月ほどして妻が懐妊した。その後、悩む様子で三か月たったある日の昼、この妻の前に年配の侍女が二人付き添って腹を撫でさすったりしていたが、男も、「出産のときにもしものことがありますか」と、取り越し苦労に心配しながら横になっていると、前にいる侍女が一人ずつ立っていき、誰もいなくなった。

◎男は、「おいらと 妻がいる二人で横になって いるので 侍女たちめ 気を利かしたな・・・」などと思いがら、そのままだらりと横になっていた。

◎北側から人が入ってくる気配がしてふすまが閉じられた。別のふすまが開いたので、「だれがあけたのだろう」と思う間もなく、見ると、赤い衣、蘇芳染（すおうぞめ：赤色だが赤に小豆色を混ぜた感じ）の水干を重ねた袖口が見えた。「いったいなんだ だれがきたのか」と訝っていると顔が見えた。

◎髪を後ろざまに結い、烏帽子もつけず、まるで落蹲（らくそん：）という舞の面のような顔なので、ぎょっとして恐ろしくなった。「さては 昼盗人が押し入ったに違いない」枕もとの太刀を取るや、「お前は何者だ だれかいなにか」妻は着物をひっかぶって、汗みずくになって臥していた。

◎異様な風体の男がふすまを開けて入ってきた。男はぎょっとして、それでも腰を抜かさずに、枕もとの刀を抜こうとしている。この男の顔は舞楽の面のような奇怪な顔、おまけに、人がみな被っている烏帽子がないという以上さ、盗人か、狼藉ものか・・・赤い衣は男が着るのは普通なのか、異常なのか当時の風習がわからない。

◎落蹲の面、これを調べてみると、まったく異常で素晴らしい、こんな顔になりたいものだと思う反面、どこかでこんな顔をしたご仁と出会うと、オレでも、はっと、ぎょっと、するだろう。まして家にずかずか入ってこられた日には、ひっくりかえるね、ほほほ。

◎舞楽面：舞楽を舞う時につける面：これはわかるけれど、舞楽と伎楽の違いはわからない。古代に大陸から伝わったもののように、この奇怪な面の形状は痛快である。できた当時はこんなに美しかったと復元したものの写真があるが、見るかぎり、古代のモノで、色あせ、潰れかけ、欠落しているようなものの方が、奇怪という意味でより迫力がある。何度か博物館やらで見かけたような記憶があるが、こんな顔の奴が、目の前にめっと現れたら、そらあびっくりするわねえ。またびっくりしそうなやつ顔の表現を、舞楽面に例えるなど、かわいそうだねえ。

◎此（か）ク伝（いふ）ヲ聞テ、此ノ落蹲二似タルモノ、急（き）ト近ク寄来テ伝ク、「穴鎌サセタマヘ。オノレハ君ノ怖シト思（おぼ）シメスベキ身ニモサムラハズ。

◎声を聞いて、この落蹲に似たる者はずっと近くに寄って来て、「どうぞおしずかに わたしはあなた様が恐ろしくお思いになるような者ではございません この姿をご覧になってこわがりなさるのはもっともでございますが わたしの言うことをよくお聞きくだされば 哀れとお思いになることもございましょう・・・」

◎穴鎌：どんな刃物だろうと思って調べた。知ってしまうと、「よくまあこんな アテ字」とびっくりくり。あな、かましい（やかましい）だとさ・・・中途半端で終わるが、あとはご自分で読んでたもれ。